

心身問題と自由

中 村 光 世

一 一元論と二元論

心的なものへの神経心理学的アプローチの特徴は、なによりも、それが行動の原因を明らかにすることをめざしており、人間の能動的で意図的な行動をも決定論的な世界の中の出来事として理解しようとしている点にあると言ってよいであろう。このアプローチのもとでは、たとえば、海底を這うウニの行動が環境条件と身体組織の機能によって決定されたものと考えられるのと同じように、人間の行動も（自然的及び社会的）環境条件と高等哺乳類の一員として独特の器官を有する身体組織の機能によって決定されたものとみなされる。というのも、人間が進化の産物であるなら、人間に帰属させうるすべての性質も当然のことながら長々しい進化過程の中で人間に備わった身体的属性を基礎としたものであるうし、心性も含めて、それらは各個人が遺伝的に受け継いだ経験的に形成した身体組織の機能に基づくものと考えざるをえないからである。これは心身一元論である。そして、人間の行動が基本的には中枢神経系の働きによって決定されると考え、心的事象や過程を特に脳の活動（の一部）とみなす考えは神経学的一元論である。以下では、現代の代表的な神経心理学者であるヘップ（D. O. Hebb）

の細胞集成体理論¹に触れながら、神経学的一元論の構想のもとでは、人間の行動に顕著に認められる特徴としての自由がどのように説明されるのか、また、その説明が心的なものとの物的なものとの区別についての一般的な哲学的な考えに照らして、どの程度確からしいものであるのかを検討することにした。

ヘップの理論に立ち入る前に、一元論と自由について若干述べておかなければならない。

一部の哲学者たちの間には、心的なものとの物的なものとの関係を、心的なものについての日常言語による記述、と物的なものについての記述の關係に直ちに置きかえて論じようとする根強い傾向が存在している。しかし、記述される事象間の存在論的關係と記述そのものの間の言語的・論理的關係とは区別されなければならない。

第一に、身体の構造や機能については、生理学的・解剖学的研究や進化論的生物学の発展によってある程度科学的と言える明確な記述が可能になってきているのに反して、心的語句は大部分、未だに科学的に洗練されないうまま放置されている。したがって、そうした語句を含む日常的な文脈での心的記述が、単に無批判に受け入れられている常識的な考えの表明にすぎないとか、あるいは奇怪な宗教的観念を表す記述と整合的に使用されるような曖昧な意味しか持たないといった可能性はきわめて大きいと言わざるを得ないであろう。そうした日常的な心的記述と神経生理学的記述との間に翻訳關係が成立するかしないかを問題にするのは、もしかすると、超新星の爆発についての宇宙物理学者による記述と占星術師による記述とが翻訳可能かどうかを問題にするのと同じくらい、科学的に意義のないことかもしれないのである。実生活上の必要や敢えて文学的想像力を逞しくしようとする場合には特に問題にならないにしても、心身關係について厳密に論じるためには、心的記述によって言及されるのが、どのような観察可能なものは推測された理論上の事象や過程なのかをある程度明確にすることができなければならないであろう。その際、いかに記述するかに先立ち、何が存在するか(何を記述しているのか)

の判断が必要であることは明らかである。一元論や二元論は、この点をめぐって対立する存在論上の立場であって、存在するとみなされたものについての語り方をめぐる立場の対立とは区別されるべきであろう。

第二に、心的なものとの物的なものとの区別を基本的なものとし、それを記述上の区別（たとえば内包的文脈を形成する語句を含むかどうか）から考えようとするなら、ある事象や過程が心的（あるいは物的）とみなされてよいのは、それがどのように記述される場合であるのかを問うことになるであろうが、これは、最初から問いの立て方を誤っているように思われる。実際、あるタイプの一元論の観点からするなら、原発事故が、「おそろしい」出来事として記述されることによって心的事象に転化するわけではなくて、それは事故の情報の認知であるニューロン群の活動に伴って大脳辺縁系のあるパターンの神経活動が記述者において生じたことが、現象言語で報告されているにすぎないと考えられるであろう。また同様に、あるタイプの二元論の観点からするなら、パズル解きが面白いことだと感じられることが、「神経学的」過程として、たとえば、体制化したニューロン群の活動が広範囲のニューロン群と新たな連絡網を形成しながら持続する過程として記述されるからといって、感じられる「面白さ」が心的実体の性質でなくなるわけではないと考えられるであろう。いずれにせよ、心的及び物的という言葉で記述上の区別を表すことにするかどうかに関わりなく、存在論の枠組みの中で二元論者が根本的に種類を異にするとして区別した存在者の間の関係を問題とすることができるし、またそうする限り、それら存在者の特性（まさに心的か物的か）が記述の仕方によって決定されると考えるわけにはいかないであろう。

心的なものとの物的なものとの区別（連関）を、それらについての記述の間の関係に置きかえてしまうのは、いわば、われわれ人間の言語使用が世界の在り方を制約し決定すると考えるに等しいのではあるまいか。

存在論的問題の独自性と共に、これと関連して今一つ注意されてよいのは、この問題をめぐる立場の選択はあの程度まではわれわれの恣意に委ねられているという点である。

一元論的観点からすれば、脳波計やポリグラフや種々の心理学的テストは、内部で進行しているある種の身体過程を推測するために有用な手段であつて、心とは結局、この過程を曖昧に指示する言葉でしかない。その際、たとえば、脳波計で記録される脳の電磁氣的活動が心的過程の生理学的指標たりうるのは、心的過程がそうした法則的な物理的効果を持ちうるもの、つまり物理的なものとみなされているからである。そしてこれは、一元論者の存在論から心的実体が予め排除されてしまっていることを意味する。では一元論者のこの態度決定はいかにして正当化されるのか。もしも心的実体が時間的・空間的限定を本質的に受けないものであるなど仮定されているとするなら、そうしたものの非存在を立証する手立てを誰も持ち合わせてはいないであろう。だから、反対者の目には、一元論者の決定は独断的なものに映るかもしれない。

しかし、この事情はむしろ二元論にとつて一層深刻な事態を招くように思われる。というのも、一元論の立場に立つなら、二元論者が心的実体の存在を想定しその振る舞いによつて思弁的に説明するほかない行動や認知に関するデータを、原理的には直接的・間接的にテスト可能な経験的仮説で説明しようとする努力を促すことができるのに、二元論者にはこれは可能とは思われないからである。しかも一元論者が提出する経験的仮説は他の広範囲の科学知識と整合的でありうるし、場合によつては積極的な支持を得る見込みもあるが、これも二元論には可能とは思われない。だが、こうした考慮によつて、一元論の選択がある程度正当化されうるとしても、ここには恣意的な面が残されていることは確かである。実際、確立された物理法則や証明された数学的命題を受け入れるのと同じ意味で、一元論を受け入れるわけにはいかにように思われる。そこで、存在論的問題における態

度決定は、「賢明な」選択に関わる問題であることになろう。

知識の現状に照らしてみても、二元論の選択は賢明と言えるであろうか。実は、一元論の立場に立った経験科学の進展は、二元論を擁護する人々にとっても好ましい事態であると考えるべき理由がある。脳についての知識の増大は、脳には出来そうもない心的働きが何であるかを明確にするのに役立つであろう。そうした知識が完成段階に達したときになおかつ説明されずに残されている心的働きがあることを確認することほど、二元論の確からしさを強固にする事態はほかにない。しかし、上に述べたように、二元論そのものは経験科学の発展に寄与しないのである。したがって、二元論の優位を確立したいと真剣に望む人が、脳についての知識が貧しい現在の段階では暫定的に一元論を受け入れておき、経験科学の進展に加担するのは、自身の最終目的の実現のためにも極めて賢明な態度なのではあるまいか。

さて、こうした考慮に基いて一元論の採用をいくら正当化しようとしても、自由について論じる際には、一元論は最初から克服しえぬ困難を抱えていることは明白だから拒否されるべきであると言われるかもしれない。自由をここでは、行なうと自ら決めたことを行なうことができるということ、つまり、行動の選択が可能であるという意味に理解しておこう。もちろん、これは、人間が自らの思考活動によって行動を統御できるといふ明白な事実を表現するものと考えられる。ところが、第一に、一元論では、心身関係は身身関係に置きかえられ、そして、自由は、環境条件と、その働きかけに身体運動をもって応答する人間個体の振る舞いと、その運動を決定する個体の内部過程という物的なものが、相互に因果的関係にありながらも成立しうる事態であるとみなされるが、これはいかにして可能だというのか。また、第二に、行動に選択性を付与する内部過程、つまり思考は、目的を思いうかべたり決意したりするといった主観的な意識経験に属する事柄であることが無視されざるを得ないので

はないか。これらは、一元論にとって避けることができず、しかも、乗り越えることもできぬ困難なのだから、脳についての将来の知識を待たずともなく一元論は採用するに値しないというわけである。

私には、これら古典的な批判によって一元論が反駁されてしまったとはどうしても考えられないのだが、同時に、特に二番目の批判に対する私自身の従来の理解はかならずしも首尾一貫せず、曖昧なものであった。それが少しでも明確になるよう試みてみよう。

二 行動の選択性

最初に、決定論的世界の中での自由の可能性を、一元論、特にヘップの神経学的一元論がどのようにして擁護するのかを検討してみよう。

一元論が自由をめぐって陥入ると言われる困難は次のようなものである。人間には意志自由と言われてきたものが存在すると前提しよう。必ずしもすべての人間が、しかもいつもそうだというわけではないにしても、ある成長段階に達した覚醒状態にある人間の多くは、自ら決めた行動を行なうことができる、つまり、思考活動による行動統御ができるのである。これが可能であるためには、いかに振舞うかを思案する思考活動は行動と因果的に関係しているのだからなければならない。単に右手が上がるだけのことなら他人に持ち上げてもらえば済むことだが、右手を上げるためには当該の筋の運動を思考活動が引き起こす必要がある。並行説的三元論や随伴現象論が説得力をもたないのは、右手を上げようと考えることによって、通常、左手ではなく右手が上がるのはいかにしてであるのかを、思考による行動の統御として因果的に説明することを放棄してしまっているからである。こ

これらの考えでは、思考活動による行動の統御は仮象であることになろう。本当のところそれは仮象なのかもしれないが、しかし、思考活動と行動との間の因果的関係が不可解なものでないことが判明するなら、並行説や随伴現象論を受け入れる必要はなくなるであろう。実際、一元論は、思考を脳という物的なものの機能とみなすことよってこの不可解さを取り除くのであって、行動の統御とは、身体のある部分（脳）の活動が他の部分（筋や外分泌腺）の活動の原因であるような事態だとみなされる。

しかし、或るもの原因となりうるものは、それ自身が他のものから因果的に制約されるものであるから、行動と因果的に関係する思考活動そのものが因果的に決定された過程だと考えられなければならない。つまり、思考活動は、それ自身が予め決定されたものであると考えられる限りで、行動を決定する原因たりうるのである。だが、自分が決めた通りに行動できるということには、しないこともできた行動をとる（あるいは、することもできた行動をとらない）という選択性が含意されているであろう。そして、これは、行動が選択に先立って予め決定されたものではない、ということの意味するのではないか。

こうして一元論は、思考活動による行動の統御（両者の因果的連関）を理解可能にすることで自由の可能性を開くと同時に、思考活動が予め決定されたものとみなす代価を支払ってそうするのだから、自らの手でその可能性を閉ざしてしまうというわけである。

非決定論を持ち出すことは、一元論者にとっては何の解決にもならないだろう。第一に、身体及び周囲の環境について非決定論を主張するのは物理学や生理学などの現在の知識に照らして根拠がない。第二に、思考活動と身体の運動との関係が非決定論的だと主張するのは行動の統御を不可能にしてしまう。第三に、思考活動そのものを非決定論的過程だとみなすのは、一元論にとって思考は身体的属性なのであるから許されない。

一元論にとつての救出路を見出すために、問題をやや異なつた角度から考えてみよう。かつてデカルトは、記憶などを含む多くの心の働きと「肢体すべての外部運動」を「器官の配置だけから自然に結果する」ものと考えたが、その際は彼は、脳を、刺激が効果器に伝達されるために通る連絡通路だとみなしたので、感覚受容器の興奮に直接依存するわけではなくて思考活動の統御を受ける行動は、松果腺を震わせることで動物精気の流れを自発的に変更できる心的実体の働きによつて説明されることになつた。本質的に、脳は行動の決定のために、現前する刺激や心的実体とは独立に何事かを行いその決定に寄与することはないと考えられている。

脳が感覚のメッセージを筋に伝える通路にすぎず、基本的には、同じ刺激は同じ反応を直ちに引き起こすのであつて、脳にはこうした刺激と反応の強い結びつきに変様を持ち込む働きが認められないとするなら、それでもなお自由を是認しようとする一元論者は、生理学者や解剖学者の見解と折り合いをつけることができなくなるであらう。ヘップは、たとえばデカルトが心的実体の存在を想定しなくても理解しようと考へた反射的とか機械的と呼ばれる行動を、それが感覚による強い規定を受けたものとみて、感覚支配的行動と呼ぶ。また彼は、外部環境によつて一方的に決定されるわけではない脱感覚支配的行動は、受容器の興奮と効果器の活動の間にそれらとは独立に進行する過程が介入することによつて可能となると考へ、それを媒介過程の介入と呼ぶ。

感覚入力と運動出力の間の直通的経路に介入する媒介過程が、デカルトでは心的実体の働きと考へられたのだが、注意しなければならないのは、脳が単に反射弓の束にすぎないのかそれとも脳そのものが媒介過程の役割を果たしうるものかは、経験的探究に関わる問題だといふ点である。つまり、物である脳に何ができたのかは、哲学者が、脳は心的なものではなくて物的なものであると言ふことによつては決まらないのである。だから、デカルトが、当時の生理学と解剖学に基いて、身体の自動的なメカニズムによつては説明しえないような

動物精気の流れを引き起こす未知のあるものが、松果腺の運動に固有の影響を与えていると考えたのは正当なことであったとしても、その未知のあるものを、将来、物である脳の働きとして説明されるかもしれない物的なものではなくて心的なもの、とみなすのは、生理学と解剖学からの不可避の帰結というよりは、前に述べたように、存在論上の判断をすでに持っている（心的実体の存在を認める）二元論者としてのデカルトの恣意的な決定なのである。

ヘッブは媒介過程を脳の可塑的神経系の働きに求め、当然のことながら経験的仮説として、「細胞集集体理論」と呼ばれる体系的学説を提出した。当面の問題に関係する範囲で、この理論の基礎的な考えを簡単に述べておこう。

周知のように、脳では百億個にもぼると推定されるニューロンが各々千個にも及ぶこともある数多くのシナプスを介して相互に結びつき複雑な連絡網を形成している。脳がかつて考えられたように、単に感覚と運動とを直接につなぐ連絡通路ではなくて、もっと複雑な働きを行ないうる器官であることは現在では常識に属することであろう。もちろん、最小単位である個々のニューロンをとりあげてみれば、多くの種類があるにもかかわらず、その活動の基本的な仕組みは皆同じであることが知られている。つまり、どのニューロンも細胞体や樹状突起に到達した伝達物質の作用によって興奮し、その結果、自身の軸索先端から伝達物質を放出するという過程を繰り返しているだけなのである。したがって、脳の複雑な働きは、個々のニューロンではなくて、ニューロン相互の結合の仕方によって変化する興奮の伝達パターンに基くのであろうが、ヘッブは、そうした興奮の流れを規定するニューロン結合の基本単位を細胞集集体と呼ぶ。これは、約百個のニューロンによって形成される「自己興奮型の閉回路」であって、これがさらに数多く結合されることで細胞集集体の上位システムである広範な

連合の回路網が形成されてゆくと仮定される。

ここでさしあたり重要なのは次の三点である。

第一に、個々の細胞集成体は、各々基本的には特定の要素的な感覚刺激作用によって形成され、また、要素的な感覚刺激の複合体は、関連する多くの細胞集成体を同時に興奮させることによって、集成体間に相互促進的な結合を形成するということである。したがって、体制化された集成体群は、もとの複合的な感覚刺激ではなく、その中の要素的な刺激（あるいはこれを要素として含む別の大きい複合的な刺激作用）をきっかけにして、全体的な活動を行なったり、部分的に活動することが可能である。第二に、どの集成体も、たとえば、ニューロン a が b の興奮を引き起こし、b がさらに c をという具合に興奮を伝達しながら、結局最初の a が再び興奮させられることになるといった、いわば興奮伝達の環形路を成しているので、a を興奮させた刺激が終了した後でも、（疲労を考慮しなければならぬので短時間ではあるが）刺激が現前する時と同じ興奮を保持しうる。同様の関係が、集成体相互の間に、そしてさらにまた、集成体群相互の間に成立していけば、広範囲の集成体活動が（疲労回復が急速であるときには）長時間、その時々々の刺激から独立に進行することが可能になる。第三に、どのニューロンも他のニューロンによって興奮させられなくても、多かれ少なかれ、膜の透過性を変化させる物理的・化学的過程の進行の結果、自発的に興奮することが知られており、それゆえ、場合によっては、体制化された集成体活動が、関連する感覚流入が全くないのに生起しうるであろう。この点からすれば、脳は、それ自身が、いわば自動「機械」のようなもので、外部環境の影響は、この「機械」の勝手な働きが、人間の環境への適応を困難にしないように制約してくれる点にあると言ってもよいのかもしれない。もちろん、脳は機械ではないが。

さて、脳における集成体活動の展開が、感覚入力と運動出力を媒介することによって、感覚支配的行動はどの

ように変容されるのか。ここでは議論を単純にするために、感覚の刺激作用によって引き起こされるこの行動の特徴を次のように簡単にまとめておこう。第一に、ある組み合わせの刺激はいつもほぼ同じ反応を引き起こし、また第二に、ある反応の出現は対応する刺激作用の現前をいつも前提し、従って第三に、刺激と反応は、急速な神経の伝導に要する時間以上の時間的分離なしに出現する（ここでは当然のことながら、疲労や他の神経活動の干渉がない状況を想定している）。身体的属性のみをもった人間が決定論的世界に置かれるなら、その人間の行動は、こうした特徴をもった感覚支配的な性格のもの以外ではありえないと考えられがちであるが、そう考えることの是非はともかくとして、たしかに、感覚支配的行動は外部環境によつて、一方的に規定されており、人間自身による行動の統御を語る余地はないように思われる。

しかし、体制化された集集体活動が介入するという前提のもとでは、現前する感覚刺激とは独立に進行する脳活動の状態が、行動に対する外部環境の作用の効果をいわば篩にかける役割を果たすので、同じ刺激が直ちにほぼ同じ反応を引き起こすとか、ある反応が出現するためには対応する刺激の現前がつねに前提されるということではなくなるであろう。つまり、運動系は、感覚のみならず、中枢における集集体活動の促進を受けそれによって統御されることになる。これが、行動の選択性である。そして、神経学的一元論者であるヘップにとつて、ここでの中枢過程（体制化された集集体活動）が思考なのであるから、以上の説明が既知の物理—化学的法則や生理学的法則から逸脱していないのであれば、彼は、決定論的な世界の中での思考による行動の統御の可能性を一応は示したと言つてよいであろう。しかし、しないこともできた行動をとる（あるいは、することもできた行動をとらない）という選択性の本来の意義が、ここで保存されていると考えられるであろうか。

次のような状況を考えてみよう。私がかかれ道で右の道ではなく左の道を進むことが予め決まっています、その

時の私の脳の活動がどういうものかも予め決まっているが、左の道に進む私の行動を決定する原因はこの脳の活動であると仮定する。この場合、私は実際とは異なつて右の道を進むこともできたのであろうか。最初に、もしも、私を取り囲む周囲の事情がそれを許す（私が抗うことのできぬ力で誰かあるいは何かを左の道へと牽引するといった特別の事情がない）状況にあるのであれば、分かれ道に至つたときの私はそのときの外部的環境によつて行動を決定されてはいなかつたという意味で、右の道を進むこともできたと言つてよいであらう。同じ意味で、左の道へと進んだ私の実際の行動は、しないこともできた行動であつたと言ふことができる。次に、では、私の行動は無原因的なもので予め決定されてはいなかつたのかというと、仮定により、それには予め決定された脳の活動が因果的に関係しているのだから、やはり予め決定されたものなのであるが、脳の活動を予め決定しているのは、そのときの外部的環境ではなくて、基本的には、自律的に不断に活動している脳それ自身なのである。こうして、私の行動が外部環境によつてではなく、私自身の脳の活動によつて決定される（統御される）ときのその脳の活動が選択に他ならないことになる。

たとえ思考そのものが予め決定されたものであるとしても、なお行動が思考による統御を受けた選択的なものでありうるのは、ヘップの考えでは、結局、皮質でのニューロン群の活動の選択性による。発達した細胞集成体は、他の身体的活動や感覚入力によつてその活動状態を変化させられなくても、自身で絶えず変化してゆく。むしろ単純化して言うならば、何がかに知覚されるのかは、どのような刺激の組み合わせが提示されるかによつて一方的に決まるのではなくて、それが中枢で進行中の先在的な集成体活動に支持的な興奮を与えるかどうかによつて決まる。つまり、中枢活動によつて、ある場合には知覚の変動性が、別の場合には知覚の恒常性がもたらされるだけでなく、不断に流入する感覚入力のとれが知覚的に構成されるかも決まるのである。さらに、知覚さ

れたものが思、考、さ、れるかどうかも、そうした感覚刺激と結合した集成体活動が同時に進行している他の集成体活動によって支持されるかどうかによって決まるであろう。これが皮質の選択性であるが、運動系へ送られる促進は、こうした皮質における興奮の流出なのであるから、行動の選択性は、結局は、皮質の選択性に帰着するのである。

ところで、心的実体の介入がなければ、受容器の興奮は決まった経路で効果器へ伝達され、その際、脳状態の變化は刺激によって一方的に決められるというデカルトの知覚因果説的なあるいは反射学的な構想のもとでは、主体の構えや態度によって主体が状況の中の何に注意し、また如何に振る舞うかが決定されるという事態を、脳の働きとして理解することが原理的に不可能であることは明白である。そして、デカルトに関して言うならば、構えや態度あるいは注意といった純粹に内的な活動を脳に対して否定するだけの科学的「保証」が、彼には当時十分にあったと考えられるかもしれない。この点についてヘップは、今世紀の三〇年代以後の神経生理学の発展と進化論的生物学の発展によって、それらの内的活動も科学的な方法の範囲に属するものとみなされうるようになったことを強調する。たしかに、高度に発達した皮質の選択性を考慮に入れ、脳の役割についてのデカルト的構想がすでに克服されつつある科学知識の現状を前提するならば、主体の側の構えや態度、さらに後に見るように、それに応じた主体の側からの世界に対する意味付与や目標指向性が専ら哲学的解釈の主題であることをやめて、科学的討議の主題となりうるのを看取するのは難しいことではない。しかし、ここでの科学の成果は、未だ初歩的なものであって、心理学の変数と生理学の変数の間に確かめることのできる対応がある程度つくようになってきた段階にすぎないと言えるかもしれない。そうはいっても、哲学上重要なものは、現在では、行動を統御する内の活動を脳の働きとして理解することが原理的に不可能なわけではないということ、したがって、二元論に対す

るかつてはあつたかもしれない科学的「保証」が失われてしまつてゐるという点である。

ヘップは、意志自由が明白な生物学的事実であり、高等動物における選択的行動に関わる基本的に哲學的な問題は存在しないと考へてゐる。彼にとつて、行動の統御は、感覺支配からの脱却を可能とする程に發達した脳を有する高等動物に数多く觀察される具体的な事実であつて、他の領域におけるいかなる具体的な事象や過程とも同じく、理論的な推測と可能な実験の積み重ねによつて理解されるべき科学的考察の対象なのである。

しかし、当然のことながら、単に思考による行動の統御可能性という意味でのみ自由について論じるのは、一面的な考察と言わざるをえないであらう。特定の行動の目的や必要は、基本的には、主体の社会的活動の個々の具体的な場面において形成されるのであり、そうした社会的脈絡の中で自由な行動について論じるときには不由とみなされるべき強制された行動も、これまでの自由の意味では、決して不自由とは言えないことになるからである。實際、何事かをする（あるいは、しない）ように命令されたり強迫されたりする場合でも、通常、行わざるをえないと考へた通りに自身の身体運動を統御することは可能であらう。自由の社会的意義についての考察は小論の範囲を越えており、別の機会に譲らざるを得ないが、次の点だけは指摘しておこう。行動を統御する思考過程に行動の目的・目標を意識することが含まれてゐるとするなら、それに加えてさらに、他の目標を指向する行動あるいは同一目標を指向する別の手段としての行動が、外部的な事情によつて遂行不可能とされてゐるわけではない状況にあるという意識（つまり、目標設定と手段としての行動が自発的に選択されたものであること）とみなすことで、自由の概念の拡張をはかることができるであらう。だが、自由をあたかも意識のレベルの問題に置きかえるかのようなこゝした拡張には、一元論者からの反対もありうるかもしれない。しかし、行動が自発

「的か強制されているかを直ちに判別可能にする行動上のきまりきった外面的特徴があるわけではないこと、また、他の目標を設定したり、手段として他の行動を選択する余地のあることに気付かない人の行動は、現実にならうとした余地のない状況に置かれておられる人の行動と同様に拘束されたものであること、が注意されなければならないであろう。むしろ、内部過程を無視して、環境条件と外面的な行動上の特徴だけから、自由について論じるのは皮相であり、二元論と相補的な結論に終わらざるをえないように思われる。

さて、これまでは、思考活動が行動と因果的に関係することができるのでなければ、自由について語ることはできないが、しかし、そのために思考を筋のような身体器官に作用する中枢神経系の働きと考えざるをえないことと、また、中枢神経系には外部環境によつて直接決定されずにそれとは独立に行動を統御する仕組みが備わっていることが強調された。もしも、そうした仕組みが存在しないのであれば、構えや態度といったものを主体の振る舞いに認める現実的な根拠はどこにもなくなるであろうし、選択は仮象であるか、あるいは不可解な心的実体における出来事であるかのいずれかであることになろう。ところが、選択である、中枢でのニューロン群の活動の展開は、行動を統御する（つまり、離れた位置にある効果器を協応させ適当な時間順序で活動させる）のみならず、同時に、周囲の環境や身体（脳そのものを含む）の状態についての思考過程でもある。この思考過程の認知内容を一般的に「観念」と呼び、この過程そのものを観念のある種の連合とみなすなら、思考による行動の統御とは、観念ないしは連合した観念群が、行動と因果的に関係する事態だと考えられることになろう。しかし、観念は、私の思考内容として主観的な意識経験に属しており、そうしたものとして観念が因果力を持つとは考えられないのではあるまいか。観念の存在論的身分について節を改めて検討してみることになろう。

三 観念の存在論的身分

一元論が行動の統御をめぐって遭遇する第一の困難は、物である脳に、現在の感覚入力とは独立に行動の決定に寄与する働きを認めることによって乗り越えることができるであろう。もちろん、感覚支配を脱した動物においても、感覚は依然として行動を誘導し続け、中枢での活動に絶えず影響を与えている。しかし、高度に発達した皮質を持つ動物の場合、行動は一定の最終効果を生じさせるように中枢過程によって方向付けられるようになり、それに応じて感覚は、周囲の事情に合わせて行動を修正するための手掛かりを提供する役割を果たすものとなってゆく。ヘップによれば、構えや態度あるいは選択的注意と呼ばれるような内的活動は、ここでの中枢過程の各々一面を成しているのである。だが、行動が一定の効果をもたらすよう方向付けられるという事態の中に、一元論にとつての次のような第二の困難がすでに潜んでいるように思われる。

いつもそうであるわけではないにしても、人間は、自己の行動がもたらす効果について予め期待を持ち、その効果を行動の目標・目的として意識することができる、と言つてよいであろう。つまり、脳によつて統御される行動の一部は、目標指向的ないしは目的的な行動であり、うるのである。では、行動がもたらすであろう効果について、それを行動の目標として意識するとはどういうことなのか。

たとえば、私が暗闇の中で部屋のライトを点灯するために、手探りしながらスイッチを入れるとしよう。この場合、第一に、私の行動はスイッチを入れることでライトが点灯することを学習した過去の経験に基いており、第二に、今スイッチを入れることで以前と同じくライトが点灯するであろうという期待を持ち、しかも第三に、ライトが点灯することは私にとって好ましいあるいは有用なことであると考えられているであろう。こうした単

純な行動は、日常の場面では自動的なものとなっており、意識的なものであることは稀である。しかし、めったに入る機会のない勝手の異なる部屋では、スイッチの位置についての以前の記憶を呼び起こし、しかも探り当てたスイッチが適切なものであろうと期待することは意識的なものとなるに違いない。ここで意識される過去の記憶も期待されている。ライトの点灯という事態も、私によって思い浮かべられた観念にはかならない。そしてこれらの観念は、内省的にのみ意識することのできるものであると思われるのに、それでもなおかつ因果力を有している、現在の私の行動に方向性を与えているのである。

さて、特定の観念が行動に特定の方向性を与えるという事態は、神経学的一元論の観点では、脳の活動による行動統御の一部とみなされ、各々の観念と同一視される各々特定のパターンのニューロン群の活動が特定の一群の運動経路に到達した結果であると考えられるであろう。この立場では、観念が因果力を持つことは当然のことなのである。しかし、意識される観念は、たとえばライトの点灯という事態であつて、ニューロン群の活動そのものではないように思われる。脳の中のニューロン群のある活動パターンが、私の身体外部のこの部屋のライトの点灯を表す観念として意識されるのはなぜであろうか。この疑問は、次のようにも言い換えられるであろう。観念を意識するのに特別の受容器を必要とするわけではないと思われるのに、ライトの点灯するのがいわば「心の眼」に「見える」のはなぜなのか。これに対して一元論は、観念の相伴現象としての脳活動に言及する以外に答えるすべを持たないであろうから、結局、目を閉じていても「見える」観念と、その観念を「見る」ことである意識の働きをその存在論の中に正当に位置付けることはできないのではあるまいか。

こうして一元論は、一方で、観念に因果力を付与することによって観念が行動を導くことを理解可能にするが、しかし他方で、因果力を有する観念（ニューロン群の活動パターン）と意識される観念（心像、イメージ）との

明白なギャップを橋渡しすることができないために、行動を統御する物的な脳過程が心的な思考過程であると主張できなくなるというわけである。

これは二元論者のみならず、神経心理学的な試みについて、それが実際に経験的に見出される神経過程と心理過程とのある程度の対応関係を明らかにする点で有意義であるのを認めはするが、両過程を文字通り同一視する気にはなれない人の背景にある考えの一つを表現しているように思われる。確かに、生理学者は、心理学者の仕事に関心を持つことなしにも追求すべき独自の課題と成果を持っており、また同様に、心理学者は、内観報告を含む行動的なデータから内部過程を推測する上で生理学者とは別の独自の課題と成果を持っている。従って、両者は部分的にはあるが実は同じ内部過程について各々異なったデータに基いて理論的推測を行っているにすぎないとみなす一元論者にとっても、両者の成果をつき合わせて心理学的変数と生理学的変数の対応関係を追求する以外に、心についての理解を深める手立てはないであろう。しかし、これは、多重的な連関を有する具体物を一度に全面的に把握することのできない人間が採らざるをえない研究方略であって、心理過程と神経過程の対応を論じざるを得ないことと、両過程を存在論的にも区別されるべき別個の過程だとみなすこととは全く別の事柄である。

一元論の立場では、たとえば、自己の行動についての意識的気付きを有するときの振る舞いについての心理学的データを、そうでないときは異なる中枢でのニューロン群の特殊な活動についての生理学的データと対応させる場合に問題となっているのは、ある神経過程に、随伴する意識やあるいは意識を含む神経過程ではなくて、意識することである状態にある神経過程（あるいは意識することである神経過程と相互作用する神経過程）なのである。同様に、たとえば、以前に見た二個の対象を各々想起することは各々異なった神経過程であり、各々に

いて以前に見ていたときと今それらを想起するのではやはり神経過程は異なつた状態にあり、そうした想起が行われるときとそれ以前とでもやはり神経過程が異なるのを知ること、知覚や記憶といった心的活動に対応する何かについてではなくて、心的活動そのものを知ることなのである。一元論者のこうした主張に対する実質的な反論となりうるのは、異なつた（あるいは同じ）心理過程が同じ（あるいは異なつた）神経過程に対応するのを見出すか、あるいは、どのような神経過程が進行しているかに関わりなく作動しうる（しかも関係して作動することもありうる）心理的機構についてのテスト可能な理論を提示することだけであると思われる。いずれにせよ、それらは哲学的論証よりもむしろ科学的アプローチを要求する事柄であることは明らかであろう。

さて、さしあたり、議論を簡単にするために視覚的な観念（視覚心像）を例にしなから、観念をめぐって一元論が陥入ると言われる困難について検討してみよう。

ヘップによれば、眼を閉じていても「見える」視覚的なイメージは、通常の知覚の際に活動していた中枢でのあるパターンのニューロン群の（それと結びついた感覚経路の興奮によるのとは別の仕方で引き起こされた）再活動にほかならない。そして、現実にある対象を見るときは異なつた、その対象についての観念を内省的に感知する特別の機構が存在するわけではないと考えられている。以前に見た対象を今思い起こしてそれについての観念を「見る」とき、以前作動していたのと同じ中枢での知覚機構が外的な刺激によらずに内的に作動させられているだけなのである。だが、もしもそうだとするならば、中枢でのあるパターンのニューロン群の活動が、ある観念を「見る」（内省的に意識する）ことであることはいかにして可能かを問うことは、知覚の成立に関与する中枢でのあるパターンのニューロン群の活動が、ある対象を見る（現実に知覚する）ことであるのはいかにして可能かを問うことに帰着するであろう。実際、知覚時に生じる皮質の視覚野でのニューロン群の活動を、たと

えば、眼前に見える花と同一視してよいなら、そのニューロン群がなんらかの仕方ですべて活性化されるときには、たとえ眼を閉じていてもその花が「見える」だろうと考えることに何の不都合もない。しかし、知覚レベルでそうした同一視が認められないなら、一般に心的なものを脳活動（の一部）とみなす一元論の立場は、少なくとも観念については説得力を欠くことになるであろう。では、眼前に見える花を脳内のニューロン群の活動と同一視することがどうして可能なのか。

すでに述べたように、遺伝的に決まった構造的な結びつきをもたない皮質のニューロンも、繰り返して受容器を興奮させる種々の刺激によって同時に興奮するもの同士が結合して、相互促進的なニューロン群を形成する。それがヘップの言う細胞集成体であるが、さらに個々の集成体を要素とする結合も形成され、それらがさらに体制化されることによって、広範な連合の回路網が形成されるに至る。その結果、少数の要素的な集成体がそれに固有の刺激作用によって興奮させられるだけでも、他の多数の集成体が同時に興奮させられることになり、予め展開されていた先在的な集成体活動は影響を受ける。つまり、外的な刺激によって中枢での興奮伝達のパターンが変様されるわけで、このときの中枢状態の変化が、ヘップによれば、知覚なのである。それは、刺激をきっかけにした集成体活動の再編過程であって、この過程が持続的に進行している限りで、たとえば、花が見えていることになるはずである。

そこで、第一に、受容器の興奮は種々の刺激に対して選択的に生じる（特異的に反応する）のだから、刺激作用の相違は受容器の興奮の仕方の相違に反映されるであろうが、この興奮が、見えているもの（花）の知覚要素（の一部）であるような感覚事象（さまざま）な傾斜をもつ輪郭や明るさの違ういろいろの色、平面や曲面の交叉（など）なのだと仮定しよう。第二に、要素的な集成体は各々、受容器のさまざまな興奮の仕方各々と固有の結び

つきをもつことから、それらの集成体の活性化は、受容器の興奮の場合と同じく各々特定の要素的な感覚事象の生起であると考えてかまわないであろう。こう考えるなら、第三に、知覚時に進行する集成体の再編過程は、要素的な感覚事象から一つの知覚（見える花）を構成する過程であることになる。つまり、見える花は、文字通りに、特定パターンのニューロン群の活動なのである。したがって、この活動が再現されるときには、たとえ眼を閉じていても花は「見える」であろう。

このように、知覚を、そしてまた観念をニューロン群の活動パターンと同一視できるなら、因果力を有する観念と意識される観念との間にあると言われるギャップは、もちろん消失する。少なくともそのギャップは、神経学的一元論の構想のもとに、心的過程に科学的にアプローチする上での障害とはならないのである。

以上の大雑把な議論について簡単なコメントを付しておこう。

第一に、知覚が成立するには身体の知覚機構の働きが必要だとしても、知覚は身体外部の、たとえば、あの花を見ることなのだから、見える花は身体外部に存在すると考えてよいのではないかと言われるかもしれない。しかし、少なくとも一元論者はそう考えるべきではない、と私は思っている。一元論の立場では、たしかに、身体の知覚機構とそれとって外的な対象が知覚の成立に関与すると考えられるが、この対象は、今の場合、見えるあの花なのではなくて、花として見られる（構成される）ことになる感覚事象（の一部）を受容器に引き起こした或るもの、いわば物自体である。それが何であるのかを知るには、知覚ではなくて理論が必要である。もちろん、見える花は物自体について脳に何事かを語りかけてはいるが、しかし、いわば知覚機構に特有の言語で語りかけているのであって、要素的な感覚事象をこの言語の基本的な単位である語であるとすれば、それらある仕方と結合してできた文が、見える花である。それゆえ、見える花は、身体外部の或るものを指示する

身体内部の存在者であり、もしかすると、幻覚の場合のように、その指示が空虚であるかもしれないようなものである。

第二に、知覚が要素的な感覺事象からの知覚対象の構成過程であるなら、知覚がつねに何ものかについての知覚である、つまり、知覚(的意識)は「志向性」を有すると言うことは、構成過程(知覚)は構成物の(何ものかについての)構成過程だというサマツなことを言っているにしかすぎない。そして、知覚は、現前する刺激作用と固有の結びつきをもつわけではない多数のニューロン群の活性化を含み、それらも知覚的構成の素材をなしているのだから、知覚が単にある対象が見えているという以上の意義(つまり、主体の側からの意味付与)をもちうることは容易に理解できることである。知覚には、感覺のみならずさまざまな記憶や期待であるニューロン群の活動が含まれており、それに応じて、知覚世界は各人各様に意味付けされた世界を成しているのである。

最後に、神経学的一元論の構想のもとでは、現在の外部環境によって一方的に決定されるのではなくて自律的な、学習可能な脳の働きによって統御される行動が、自由の基礎的な意味を成している。心的なものは、そうした脳の、過去経験を反映するニューロン群の活動を意味するのだから、それは通常考えられるような、物的あるいは物質的なものの対義語ではない。精神機能を営む身体が存在を認めるが、そうした身体と現実的に関係する心の存在を認めない一元論は、心的と物的との区別をなんらかの意味で基本に据える二元論的な問題設定を、最初から拒否しているのである。心身関係について、またそれを基礎にして自由について論じる人は、心的なものについての日常的な理解に訴えてそれから出発するのではなくて、心的と形容されるものが、どのような具体的な事象や過程(あるいは、それらから推測されるいかなるもの)であるのかを明瞭に限定し、かつ、その存在論的身分を明らかにすることによって、議論をできる限り明晰にする必要があると思われる。そして、心的なも

の、に、つ、い、て、の、ま、た、自、由、に、つ、い、て、の、認、識、論、的、方、法、論、的、問、題、は、予、め、「賢、明、な」仕、方、で、選、択、さ、れ、た、各、人、の、存、在、論、上、の、枠、組、み、に、従、っ、て、解、決、可、能、か、ど、う、か、が、論、じ、ら、れ、る、こ、と、に、な、る、で、あ、ろ、う。

〔註〕

- (1) 参照したD・O・ヘップの著作・論文は次のものである。
 - ① 『行動の機構』 白井常訳 (岩波書店)
 - ② 『行動学入門』 (第三版) 白井常・他訳 (紀伊国屋書店)
 - ③ 『心について』 白井常・他訳 (紀伊国屋書店)
 - ④ 'A neuropsychological theory' in S. Koch (ed.) *Psychology: a theory of a science*, Vol. 1 (Mc Graw-Hill, 1959) . P. P. 622-643.
 - ⑤ 'Concerning imagery', *Psychological Review*, 1968, Vol. 75, P. P. 466-477.
- (2) デカルト「人間論」(『デカルト著作集』第四巻、白水社) 二八六頁。
- (3) D・O・ヘップ②『行動学入門』九三頁。なお、ヘップの考えを理解する上で次の論文から多くの示唆を得た。河内十郎「心理学の立場からみた脳」(『理想』一九八五年六月号、五〇〜六三頁)。
- (4) D・O・ヘップ③『心について』二八四頁参照せよ。
- (5) ここでは観念をめぐる問題の中心に位置する概念形成については全く取り上げることができない。それは別の機会に譲らざるをえないが、ヘップ自身による平易な説明については、次の箇所を参照してほしい。D・O・ヘップ③『心について』二一九頁〜二二二頁及び二三五頁以下。

(6) この仮定は、もちろん、直接にテスト可能ではないし、存在論上の他の一般的な仮定と同様、たかだか「確証」しうるだけであろうが、しかし、この仮定を批判する人が依拠せざるをえない仮定も同じ境遇にある。

肝心なのは、無前提を装うことではなくて、自己の依拠する仮定がテスト可能ないかなる特殊理論と結びつきうるのかを明瞭にすることであって、すでに述べた「賢明な」選択がここでは問題であるように思われる。